神奈川県立鎌倉支援学校における学校運営協議会開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催した。

審議会等名称	令和６年度　神奈川県立鎌倉支援学校第２回運営協議会		
開催日時	令和６年 10 月 24 日（木）　午前９時 30 分～午前 11 時 00 分		
開催場所	会議室		
出席者	委員：８名 事務局：６名		
次回開催予定日	令和７年２月 20 日（木）		
問合せ先	神奈川県立鎌倉支援学校　　副校長　望月　好子 電話番号　　０４６７－４５－１９５１ ファックス番号　０４６７－４３－４８０８		
下欄に掲載するもの	議事録	議事概要とした理由	
審議(会議)経過	１　学校長挨拶 ２　令和６年度学校評価中間報告 ①　授業におけるＩＣＴ機器の利活用について ～生きる力・主体性を育てる授業実践～ 肢体不自由教育部門の実践報告　情報・情報教育係長より 知的障害教育部門の実践報告　　高等部本校 学部長より 【質疑応答】 会　長：いくつか課題がある。子どものニーズに対しての利用の仕方、学校全体としての取り組みについてアドバイスをもらいたい。各委員の皆さんにご意見やアドバイスをお願いしたい。 Ａさん：理解ができていない部分もある。一人一台端末、ハードだけが先走って、その取り組みについては学校に任されているのか。学校の先生方が四苦八苦しているという現状でよいか。これは県下で行われているものなのか。 校　長：小中学部義務教育段階については、学校支給、高等部は就学奨励費を使って一人一台端末を購入し個人の所有物。肢体不自由教育部門は iPad、知的障害教育部門はクロムブックである。 Ａさん：前例がない中では、進めていくのはなかなか難しいと思われる。本人、保護者とのすり合わせなどのバランスを含めて難しい取り組みだろうという感想を持った。 報告者：ギガスクール４年目。他県での取り組みはある。自分でその情報は取り込んでいるものの発信ができていない。家庭との連携については把握できていない。 Ｂさん：ハードはそろった。アプリはゲームみたいなもの。教育現場とのなじみ方は？反応が乏しい重度のお子さんについての意思決定支援を考えると、ゲームは自分で体験できるというよい取り組み。 子どもが何に興味を持つか、子どもを知る、子どものニーズを読み取ることに活用する、子どもが何をもっているか探ってみるつもりで色々と使ってみるという発想を持ってはどうか。子どもの興味をどう伸ばしていくのか、アプロ		

	ーチの仕方を考えていく。今は、何のためのものなのか、はっきりしていない。はっきりすれば、おのずとどうすればよいのか見えてくるのではないか。ゲームはきっかけで、子どもを知るためのツールとすればよいのではないか。 会　長：興味関心をさぐるきっかけや体験としての活用を。 Ｂさん：思い込みで進まない。思い込みで進むと失敗する。保護者の理解と本人の興味について一致しない場合もある。本人の興味を学校側で探ることは必要。 Ｃさん：障害福祉の現場でもＩＣＴの活用をと言われているが悩ましい。準備段階で考えると、まずは教員も子どもも触れてみる。次の段階として、卒業後の場面で生徒の生活をサポートできるようなコミュニケーションツールであったり生活をサポートできるものであったりする活用を考えていく。社会生活における個々の課題がある。個々が生活しやすくなるアプリがたくさんあるとよい。 会　長：コミュニケーションツールとして集団活動の中で使えるようなことをやっているか。 報告者：ＯＨＰシートを活用して伝えるなど、実際に外で使うとまでは至っていない。 会　長：音声認識アプリなどある。 Ｄさん：話せない方たちが目の動きでコミュニケーションがとれるのはよい。昨年、学校に登校できない子どもがリモートで授業参加している授業を見た。また、鎌倉市の中学校での防災の授業で逃げ地図作りに参加した。生徒たちは、グーグルマップを使って、画面上で家から避難所まで逃げるシミュレーションを始めた。どのくらい時間がかかるか競争が始まった。教室での発想力と面白さ、一人一台端末だからできる。危険なものはあったかなど問題提起すると、生徒たちが考える。子どもの理解度、発想を広げていくものである。 会　長：遠隔授業。保護者は喜ぶ。学校の生活音が聞こえる、学校の環境音がうれしい。訪問教育などで活用できる。 Ｅさん：鎌倉市はICT５年目。はじめは一人一台ではなかった。頻度は少なかったので進まなかったが、一人一台になったら、子どもたちが自分でどんどん取り組み始めた。筆順アプリなども使える。教員も自分でやってみないと進まないので、やってみてできることを探っていった。月１回の会議の中で研修や市の研修など行っている。授業で使っている。体育の中で、生徒同士で動画を撮りあい、動きの改善策を考える。新聞作り、鍵盤アプリ、プログラミングなど授業で始めると子どもたちは自分でやっていく。取り掛かりを与える。校外学習で写真を撮る、編集する。端末は道具の一つであることを子どもたちには認識させる。肖像権、著作権、友達の顔などルールをしっかり押さえることが大切。貸し出しているもので家庭にも持ち帰るため、何をやっているか教員が把握していることを子どもに伝える。教育の範疇の中での使用を強調する。 会　長：情報教育は大切。家庭での利用というところで、家庭での取り組みはどうかＦさんのご意見を伺いたい。 Ｆさん：家に持って帰っても、カバーをつけて一度も触っていない。家庭でも使って慣れさせていった方がよいと思った。視線入力、デジタルリハビリツール、保護者も一緒に体験したのか。機会があれば保護者も体験してはどうか 報告者：デジタルリハビリツール、視線入力、鎌フェスでできればと考えている。

	②　ホームページの取り組みについて ～地域のニーズを踏まえた学校情報の発信～ 情報・情報教育係長より 【質疑応答】 報告者：特技を発信できていない。ＨＰこんなふうにしたら？という情報を得られていない。求められていることなど、今後、鎌倉支援学校を伝えるツールとして機能していくためにご意見をいただきたい。 会　長：鎌倉支援学校だからこそ、発信できるコンテンツについてご意見を。関谷小との交流などはどうか。 Ｅさん：グランドデザインが各学校であるが、保護者には学校がやっていることと結びつかない。グランドデザインの「ここ」の活動ということを載せてみた。グランドデザインの「ここ」というのを載せてみたらどうか。やったことと結びつくように打ち出す。 会　長：学校の教育活動とグランドデザインのひもづけした発信をしてはどうか。 ３　学校運営協議会各部会報告 ・学校防災（福祉避難所）部会 ・切れ目ない支援部会 会　長：障害理解を広げるというところでご意見があれば。 Ｂさん：切れ目ない支援とは、学校の中だけでなく、同世代の子どもを地域でどう育てていくか。柔軟な考え方ができるうちに子どもたちに理解を。小中学校の子どもから伝えていく。10～20 年後を見据えた取り組み、気持ちの持ち方をしていく必要性。学校現場しかできない子どもたちへの教育を。 校　長：学校を後押しするコメントありがたい。関谷小との交流は、インテグレーションの域を越えていない。インクルージョンの形を作っていく。今いる子どもたちのためにできること、関谷小と地続きの立地、学校教育としてできることを10～20 年後にむけてコツコツとやっていく。 会　長：高校生は興味ある。中学校がポイントかもしれない。中学生とは距離感がある。 校　長：鎌倉支援学校のセンター的機能の活用をしていく。卒後の取り組みを進めるにあたって、まず鎌倉支援学校の取り組みを見に来てほしいと近隣中学校の校長との間で話題にした。 Ｅさん：次年度で鎌倉市内の全校に特別支援学級が設置されることとなる。 Ｂさん：特別支援教育を外へ出ていくというスタンスで。待ちではなく攻めの姿勢で。